



# 筑紫女学園大学リポジット

## The Novel "NAIKAI NO WA" and Its Archaeological Observing Point

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 忠彦, OHTSU, Tadahiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/158">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/158</a>

# 小説『内海の輪』に読む考古学

大 津 忠 彦

## The Novel “NAIKAI NO WA” and Its Archaeological Observing Point

Tadahiko OHTSU

### はじめに

「社会派ミステリー」の創始者として、没後も不動の人気・好評を博す松本清張（1909年12月21日生，1992年8月4日没）。膨大な執筆作品中，その偉才，多才ぶりを物語るジャンルのひとつに，いわゆる「考古学もの」とでも称すべき，古代遺跡・遺物あるいは考古学者を題材とする作品の一群がある。ここにとりあげる『内海の輪』も，その代表作のひとつである。『内海の輪』（『霧笛の町』改題）は1968（昭和43）年2月16日～10月25日に，松本清張が『週刊朝日』に連載した小説作品であり，「緊密な伏線と精妙な心理描写が光る倒叙ミステリーの秀作」（郷原 2005年）と評され，これを原作とする映画化・テレビドラマ化作品の公開も一再ではない。

いま，『内海の輪』を考古学的に読み解き，この小説構成の基を検討（登場する考古学資料を実際の出土事例に照合・比較）し，あくまでも虚構世界の「小説」ながら，そこに松本清張作品の「リアリティ」，史的問題意識の鋭利さの源泉を検証してみたい。なお，検討資料の拠りどころとしては，角川文庫版（昭和五十三年一月二十日十三版発行；初版発行は昭和四十九年五月二十日）を使用し，本稿において引用文末に括弧で付記した「頁」はこの「十三版」のものである。

### I. 小説の主人公と物語展開の時代設定

#### 主人公と考古学

主人公「江村宗三」は，荻窪に居を構える東京のZ大学教員（pp. 9,194,195）。年齢は，小説の主要部においては，41～42歳。「宗三は考古学をやっていた（p. 10）」。「宗三は勉強家のほうだった。夜中まで机の前に居て本をひろげたり，ものを書いたりしている。宗三の研究は学界でもわりあい注目されていた（p. 48）」。「具体的には，「弥生時代を専門（p. 162）」としており，「ことに，高地性遺跡の問題は彼（＝宗三，筆者注）がいま興味をもっている課題であった（p. 164）」。「主人公の大学時代の友人「長谷徹一」（東京の新聞社文化部勤務）によれば，「江村宗三」は「有望な新人とみんながほめている（p. 54）」と評され，「今の主任教授があと二年で停年になるので，その

ときは教授になれそうであった (p. 54)」。そして、「宗三は予定通り教授に昇進した (p. 194)」。

後述するように、小説後半以降において具体的な遺跡、遺物に関わる物語展開となるが、もちろんそこに至るまでも、主人公本人の考古学者としての専門家らしさ、その立場ぶりが示唆されている：

(岡山にて、宗三は逢瀬の相手美奈子に、牛窓<sup>うしまど</sup>へ行くことを提案する)「そのへんの島に縄文前期の貝塚がある。五、六年前に行ったけど。町の丘にはオリーブなど栽培していて、ちょっとした南国気分だが、まあ、万葉集の歌で有名な。(p. 64)」

(美奈子共々、仙酔島への連絡船を降りる際、中学生の団体とその引率者に対し)「中学教師のなかでも考古学をやっている者がいるので、宗三は何となく顔をそむけた。(p. 92)」

「人を殺しても、それが人目には殺人と分からぬような方法はないかと宗三は思った (中略) 宗三は人類学教室で古代の人骨の標本をたくさん見ているし、発掘でも人骨を掘り出すのは珍しくなかった。あの古い白骨<sup>やじり</sup>のなかには病気や事故死以外に殺された死体だって多いにちがいない。なかには頭蓋骨<sup>やじり</sup>に鏃<sup>やじり</sup>を射こまれたあとがあったり、切り創<sup>きず</sup>が残ったりしているのがあるが、そういう跡が無い以上、区別はできない。(p. 137)」

主人公宗三の研究課題と設定された「高地性遺跡」とは、弥生時代集落の一形態をさす。すなわち「西日本では弥生中期～後期に、水稻栽培に適さない高地に立地する高地性集落 (下中邦彦編集・発行、『世界考古学事典』、平凡社、1979年初版第1刷より、鷹野光行筆「集落址」の項)」の意であり、考古学的解釈では「時間的に限られており、溝などの囲郭施設のあるものもことから昔のような集落であるとする説や、水稻栽培の集落に対する畑作の集落であるとする見解がある。香川県紫雲出遺跡、兵庫県会下山遺跡などがある (同前)」と考えられている。ちなみに、例言中の遺跡のひとつ「兵庫県会下山遺跡」は『内海の輪』に言及のある関連遺跡のひとつである。

### 『内海の輪』の時代設定

物語の舞台はいつか？この小説の時代設定がいつかについて、先ず整理しておく必要がある。これについては、江村宗三の行動形態が示唆する。すなわち、その愛人「美奈子に一日でも早く遇

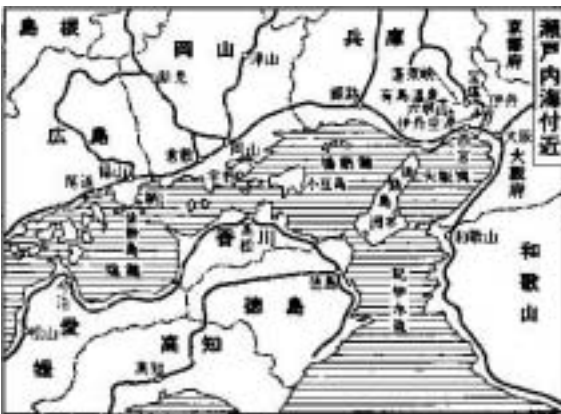


図1. 『内海の輪』関連地図 (角川文庫所収より)

いたい気持ちが湧<sup>わ</sup>き、その日が待ち遠しくなった。(p. 47)」心境裡に、「宗三は朝早い新幹線に乗った。これは正午前には大阪に着く。山陽線に乗りかえて岡山に降りるのが二時ごろだった。(p. 51)」ということから、それは東海道新幹線開通年すなわち1964 (昭和39) 年以降、そして山陽新幹線岡山開通すなわち1972 (昭和47) 年以前、とみなされることが考えられる。同様に、宗三と美奈子が仙酔島にて旅程を相談する件での宗三の言「しかし、これから大阪まで列

車で行くのがおっくうだな。福山から急行に乗ったとしても四時間くらいかかるんだらう？ (p. 101)」も、山陽新幹線岡山開通以前であるらしいことを推察させる。

また、宗三と美奈子が尾道に行く場面があるが、この中の「近ごろ新しくできた向島までの大橋 (p. 67)」という件を、「尾道大橋」を指していっているとするならば、その開通の1968 (昭和43) 年以降となろう (ただし、その実際の開通は1968 (昭和43) 年3月なので、「尾道大橋」とした場合、小説発表時期 (2月16日～10月25日) とのあいだに先後関係上やや疑問が残る)。

いまひとつの時代判定の方策として注視できるところは、考古学に関連した以下の件である：

「宗三は六甲山に点在する各遺跡の調査報告書をもう一度読み返した。五箇山、会下山、城山、伯母野山などの遺跡は弥生中期にはじまる居住跡で、生駒山<sup>いこま</sup>の両側にあるそれとともに、水稲耕作に適する低湿地帯を控えた高地集落の跡と報告されている (pp. 164-5)。」

この件が言及する諸遺跡は、いずれも実在の古代遺跡である：

1. 五箇山 (五ヶ山) 遺跡：西宮市仁川五ヶ山 (畿内第4様式：弥生時代中期)
2. 会下山遺跡：芦屋市三条町会下山 (畿内第3・4・5様式：弥生時代中・後期)
3. 城山遺跡：芦屋市城山 (鷹尾山) (時代不詳)
4. 伯母野山遺跡：神戸市灘区篠原本町牛小舎山、勝田山、伯母野山 (畿内第3・4様式：弥生時代中期)

これらの遺跡に関しては、その調査研究が具体的に進展、公表された期間が、1964 (昭和39) 年以降1972 (昭和47) 年以前の範囲内におさまる (兵庫県教育委員会 1969年、所在地表示は当時のもの)。

ただし、考古学者江村宗三の行動「宗三は書棚から出した報告書『摂津高地性遺跡の研究』を再読しはじめた (p. 165)」の「報告書」という表現を取って注視すれば、出版物形態が発掘報告書であると同時に、それは各遺跡に言及した総括的内容を含み持つもの、とみなしたほうが良いであろう。筆者は、したがって、この「報告書」として『兵庫県文化財調査報告 第1冊 神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈 調査報告書』(図版篇1966年、解説篇1969年、兵庫県教育委員会) のようなものを考えたい。

たしかに、『内海の輪』の発表年と、この実際の「報告書」と考えられるものの刊行年とのあいだには時間的齟齬が生ずる。しかし、「神戸市桜ヶ丘」遺跡の発見 (それは1964 (昭和39) 年12月10日と伝えられている) は当時耳目を驚かせ、その意味では『内海の輪』が描く小説世界と符合するところがある。作家松本清張が考古学者江村宗三をして前代未聞の発見劇——「これは考古学上最大の発見であった。このような幸運が将来二度とあるとは思えなかった (p. 190)」——をなさしめたとするミステリー構成にとって、「神戸市桜ヶ丘」遺跡の発見は考古学上の事実背景として申し分なかったのではないかと考えたいのである。

したがって、前述の根拠共々、筆者はこの小説の物語設定時代を、作品発表年すなわち1968 (昭和43) 年前後と捉えておきたい。

## Ⅱ. 『内海の輪』における考古資料の登場とその背景

### 遺跡の設定

『内海の輪』の後半、すなわち第12章以降、とくに第13～15章こそ物語が考古学と具体的に交錯しつつ進行する構成となっている。そこは、頁数にして小説全体のほんの2割にも満たない分量ながら、考古学的内容をもっとも濃密に込めた物語展開となっている。



図2. 蓬萊峡とその周辺 (兵庫県教委 1969年所収地図より改変)

着いた (pp. 172,173)」。そして宗三は到着するや否や「美奈子の死体が一週間前に発見された (p. 173)」ことを聞き知るのである。

この蓬萊峡山中の調査対象遺跡に関し、松本清張は次のような考古学的設定をしている：

(遺跡発見の発端)「兵庫県西宮市岩倉山西北方の山麓中から銅剣一個と弥生中期の土器数個が山歩きの青年によって発見された。(p. 161)」

(主任教授が宗三に云う)「発見場所の立地条件からみて、高地性遺跡らしいが、どうやら祭祀<sup>さいし</sup>跡<sup>あと</sup>のようだね。あのへんは六甲山にふくまれる。六甲山には、君も知っての通り、五箇山<sup>ごかやま</sup>、会下山<sup>えげやま</sup>、城山<sup>しろやま</sup>、保久良<sup>ほくら</sup>、伯母野山<sup>おぼの</sup>などの遺跡があるから、今度のもその一つだろう。岩穴の近くから銅剣が見つかったというが、これもいわゆる岩陰<sup>がんいん</sup>遺跡らしい。(p. 162)」

「宗三は地図を調べて、発見地の「兵庫県西宮市岩倉山西北方」が蓬萊峡<sup>ほうらいきょう</sup>の中にあたっていることを知った。岩倉山は四百八十九メートルだが、その西北に流れた山塊は複雑な地形で多くの断崖や豁谷をつくり、(p. 162)」

(塚田講師の遺跡の場所に関する報告)「宝塚から有馬温泉に行く自動車道路のすぐわきからはいるんですが、狭い小径<sup>こみち</sup>を二キロばかり行ったところです。二百メートルくらいの山腹で (後略) (p. 166)」、「われわれの基地になっている船坂という部落からはそう遠くありません。(p. 167)」

物語の大きな転機として、主人公宗三は不倫相手の美奈子を殺めた場所である「蓬萊峡」を、一年後、皮肉にも今度は、自らが指揮を執るべき考古学調査の遺跡発掘現場として再訪することとなる。新大阪駅に出迎えられた宗三はタクシーで、宝塚を経由し調査現場をめざす：「車の行き交う舗装道路の状況は美奈子と走っていたときと少しも違わなかった。一年前が昨日のようであった。途中、その道路から分かれたせまい道にはいって、農家ばかりの船坂部落に



## 考古遺物に関する設定

調査の発端となる発見資料（前記）に関し、調査現場責任者のひとりらしい塚田講師は、いまだ在京中の宗三へ、次のように電話で報告していた：

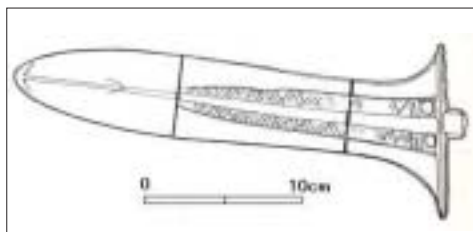


図3. 銅戈（兵庫県教委 1969年所収 図78より）

（発見の銅剣は）「一種のクリス型銅剣ですね。錆で腐食していますが、三つに折れた断面を見ると、褐紅色を呈しています（p. 168）」、「全長が二四〇ミリ、茎の長さが六ミリ、茎幅一四ミリ、身中央の幅が三〇ミリ ……（p. 168）」塚田講師のいうこの「クリス型銅剣」とは、今日一般に「銅戈」と称される青銅利器のことである（図3）：「銅戈はマレー原住民の武器クリスに似て

いるところから、かつてクリス形銅剣とよばれたことがあり、いまでもクリス形銅戈とよぶ人もある」（水野他 1959年）。なお、『内海の輪』においても「発見のクリス型銅剣（銅戈）（p. 189）」と明記するところがある。

「石器といっしょに出る土器の破片は櫛目式で、いわゆる畿内第三様式に属しているようです。見たところ珪砂の含有量が多く、少々厚手です。壺形が多いですね。（p. 168）」

（石器は）「石鏃、石錐などがありますが、打製のほうは六甲山から出る輝石安山岩、つまり灰黒色のサヌカイトです。（中略）磨製のほうは石斧で、（中略）そのほか祝部土器が二個……（pp. 168-169）」

塚田講師によるこれら一連の報告事項は、考古学の発掘調査に先立ついわゆる「一般調査」によって得られる「表採資料」（表面採集資料）に関する所見である。そこでは、時代の指標となる遺物として「櫛目式」、すなわち櫛描文様のある「畿内第三様式」土器を考古学的標準（示準）資料として、発掘調査予定地点が弥生時代中期に帰属する遺跡の可能性が大であることを予察させる、という記述になっている。先後を含む記載事項については、当時の学説がかなり正確に把握されていることが読み取られる。すなわち、近畿地方における弥生式土器様式の変遷に関するひとつの学説（当時）は下記の通りである：

- ・ 「畿内の弥生式土器は、第一様式から第五様式まで、五つの様式に区分される（中略）。これを前・中・後の三時期にあてると、前期 - 第一様式、中期 - 第二、第三、第四様式、後期 - 第五様式となる。（田辺・佐原 1966年 108頁）」
- ・ 「畿内中期は、櫛描文の出現をもってそのはじまりとする。（中略）第三様式は凹線文手法の存否によって、これを（古）・（新）に二分する。（中略）第三様式（古）の段階はまた、櫛描文の最盛期でもある。第三様式（新）にはいると、凹線文が出現して、櫛描文ははだいに衰退する。（同前 109～112頁）」

はたして、翌日から始められた宗三らZ大学による発掘調査により、ここが「祭祀趾（p. 189）」

と判明、そして同時に「細型銅剣」が出土する：

(細型銅剣は)「偶然に銅戈の発見された地表より七十センチの深さのところであって、そこからは弥生中期後半の櫛目文土器がいっしょに見つかった。銅戈のあった地表より三十センチ深さの層に弥生後期の土器が出ることから、この祭祀址は弥生中期の上に後期のそれが重層的にできているのが分かる (p. 189)」

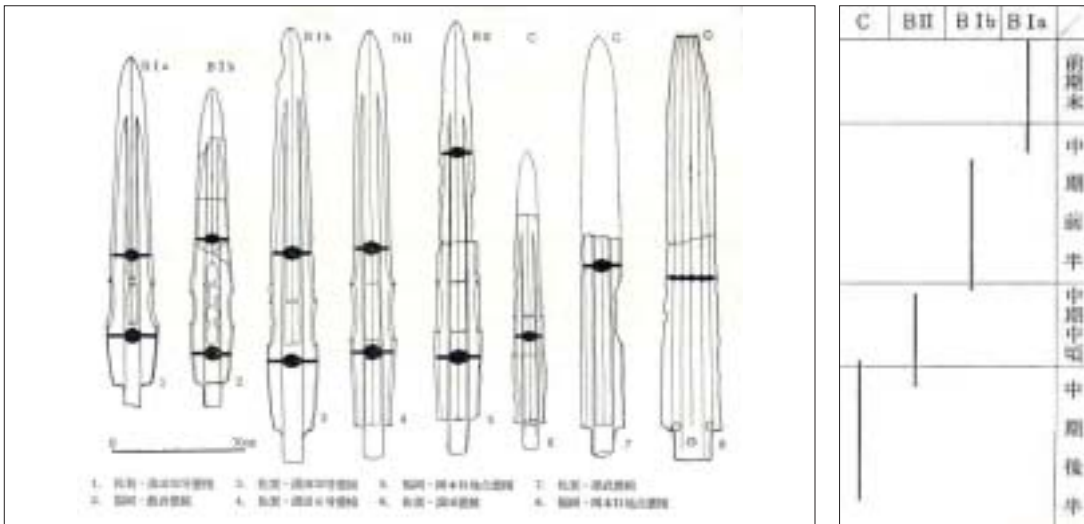


図4. 細形銅剣分類 (左) および様式編年 (右) (森 1968年所収より改変)

ここに出土遺物のひとつとして「細型銅剣」が小説に使われるに際し、「細型銅剣は弥生前期末から中期にかけてのもので、出土はほとんど九州に限られ、(後略) (p. 189)」他等にみられる記述もまた、実際の考古学研究によって、『内海の輪』が発表されたころまでにはすでに詳細に体系付けられた「細型銅剣」についての有力な学説 (たとえば森 1968年) に照合して、ほとんど問題はない：

- ・ 「舶載とみられる細形銅剣類は、甕棺から副葬品として発見される。(森 1968年 131頁)」
- ・ 「(甕棺が) 成人のための墓制として成立するのは弥生前期末の時期であり、弥生中期に盛行するが、後期に入ると漸減し、後期末から古式土師器の時代にはむしろ小児甕棺として残存する (同前 132頁)」
- ・ 「わが国ではその遺跡が甕棺墓であるため、甕棺の編年を手懸りにして、細形銅剣の編年を行なうことのできる便宜がある (同前 130頁)」
- ・ 「わが国で細形銅剣の行なわれた期間である弥生前期末から中期後半までの間は、前二世紀の前半から少なくとも一世紀前半まで約二世紀間に及ぶとみてよい (同前 129頁)」
- ・ 「舶載型式の細形銅剣及び細形銅矛・細形銅戈などが副葬されるのは、先にのべたように前期末から中期後半に至る期間のものであって、特に福岡県・佐賀県を中心に長崎県の一部に及んでいる。(同前 132頁)」

さて物語の進展では、1年後、この遺跡を含む一帯があらためて考古学的調査対象地となる：

「その夏、摂津岩倉山麓一帯にわたって地元のP大学（＝大阪の大学考古学教室、筆者注）の考古学班による大がかりな発掘調査が行なわれた。これは前年に東京のZ大学（＝主人公宗三の大学、筆者注）の発掘成功に刺激されたからであった。（p. 194）」

「弥生中期から後期初頭の集落跡が数箇所発見されたが、そのなかで、Z大学が掘った場所より一キロあまり西北に寄った地点からの出土品は異彩だった。多紐細文鏡<sup>たちゅうさいもんきょう</sup>二面とガラス釧一個が見つかったのである。（同前）」

「他の出土例のように期待された銅鐸や銅剣は出なかったが、これは近くで東京の大学が前年に細型銅戈一個（ほかに偶然発見のもの一個）を発見しているので、この蓬莱峡の山中が弥生中期ごろの祭祀跡であることが推定できた。（同前）」

ちなみに、「東京の大学が前年に細型銅戈一個（ほかに偶然発見のもの一個）を発見している」という記述は、事の内容上、主人公宗三の大学による発掘成果の意と解釈すべきであろう。とすれば、宗三らによる調査成果に関する先の「発掘報告書」云々箇所の記載事項、すなわち「この祭祀跡からは、発見のクリス型銅剣（銅戈）<sup>どうか</sup>以外に、一個の細型銅剣が発掘された（p. 189）」と併せて、調査の発端となった発見品のひとつの「クリス型銅剣」以外に、調査による銅戈の出土点数は複数（2点）ということに理解できる。

物語ではここにあらたに、当該時代の特徴的青銅製品のひとつとして「多紐細文鏡」が出土考古資料に加わる：

（後に、地元P大学による大がかりな調査が行われ）「Z大学が掘った場所より一キロあまり西北に寄った地点からの出土品は異彩だった。多紐細文鏡<sup>たちゅうさいもんきょう</sup>二面と（中略）多紐細文鏡は、これまでのところ日本では四面しか得られていないので、この発見はたいへん貴重であった。（p. 194）」

この「日本では四面しか得られていない」というのは、物語当時にあつては、以下の各遺跡からの多紐細文鏡出土資料事例を指すと考えられる：

- 大阪府柏原市大泉 （1925年、単独出土）
- 奈良県御所市長柄 （1918年、銅鐸と共伴）
- 山口県下関市梶栗浜 （1913年、箱式石棺より銅剣共伴）
- 佐賀県唐津市宇木汲田 （1957年、甕棺より銅剣共伴）

### 「ガラス釧」の登場

「畿内第三様式土器」、「細形銅剣」、「多紐細文鏡」などの考古資料を遺跡出土品として、物語の舞台を「この蓬莱峡の山中が弥生中期ごろの祭祀跡」であると、時代設定的にも堅固なものにして、いよいよ作家が登場させた考古資料が、書名の「輪」の意味する「ガラス釧」である：

（地元P大学による大がかりな調査が）「鏡（＝多紐細文鏡を指す、筆者注）にまして収穫だったのはガラス釧がそこから出たことだった。ガラス釧は多紐細文鏡よりも発見例がはるかに



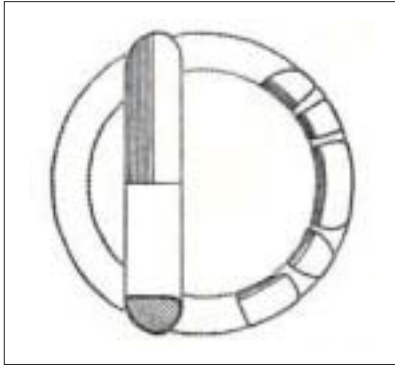


図5. 二塚遺跡出土のガラス釧，復元  
内径6cm (原田 1975年所収より改変)

稀少きしょうなので，発掘調査班をたいそう喜ばせた。(p. 195)「ガラス釧」を，しかし，主人公宗三は，P大学調査による発見以前に，決して他言出来ない状況下においてすでに発見していた。すなわち，自分の犯した犯罪(美奈子殺人)の現場で，将来当局から発見されれば犯人特定に結びつく証拠物件になることが危惧される自分の遺留品(上着のボタン)を回収しようとした際，偶然に発見してしまったのがこの「ガラス釧」であったのである。そしてこの「ガラス釧」の発見は，のちに考古学者としての顕示欲を宗三に駆り立てることとなる：

「宗三は木の枝を切った。汗を流しながらそれを使って，土をの除けはじめた。(中略)ボタンも，美奈子の品もついに無かった。が，その替わりの物が出てきた。—— (p. 185)」

「ときどき宗三の心は，或る物を人に見せたい誘惑にうずいていた。ある物とは一個のガラス釧くしろである。落としたボタン一つを捜しに，あの場所を，木の枝で掘り返したとき，その土の下から見えたものであった。(p. 189)」

宗三がみずからの犯行現場でこの時偶然にも発見したガラス釧を，弥生研究の専門家宗三は「古代中国から渡ってきた弥生中期のもの (p. 190)」と解釈する。ガラス釧のそれまでの発見例は2例のみであったところから，自らの発見は，幸か不幸か，「考古学上最大の発見 (p. 190)」だったのである。「発見例は2例のみ」とは「丹後国中郡三重村発見のもの」と，筑前国遠賀郡須玖出土のもの (p. 190)」を指す。そのうち，前者は，今日の京都府京丹後市大宮町三重の三重古墳(比丘尼屋敷墳墓)より1900(明治33)年に発見されたといわれる古墳時代資料，そして後者は，福岡県前原市東の二塚遺跡より太平洋戦争中に甕棺より出土したといわれるもの(図5，弥生時代後期)を指す。ちなみに1978年に，東京国立博物館で開催された特別展観「東洋古代ガラス」の図録中には，「出土地不明」としてガラス釧6点(いずれも完形)の写真紹介があるものの，『内海の輪』発表時，来歴の明確な考古資料はたしかに上記2点のみであった。

物語中における「ガラス釧」資料の埋納状況，帰属年代について松本清張は，宗三発見事例に関しては，宗三に「土墳墓」の副葬品のひとつと推察させている。また，P大学による発掘品については，出土状況に関する記載はないものの，「東京のG大学の山口教授 (p. 195)」の見解として，それが弥生中期遺跡からの出土品として極めて重要であるとされた点は，前記の「多紐細文鏡」と共に見つかったとする設定に拠ると考えられる。

### Ⅲ. 新たな考古資料：大風呂南1号墓出土の「ガラス釧」

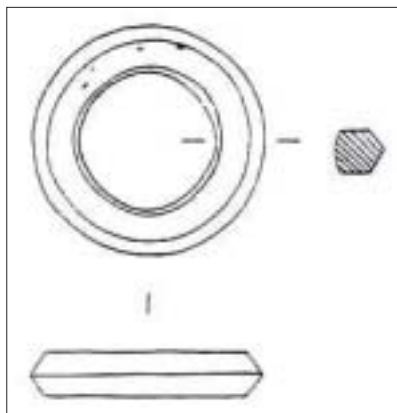


図6. 大風呂南1号墓出土のガラス釧  
(「大風呂南墳墓群現地説明会資料」より)

等々が援用され、考古学の学説からみて大きな矛盾のない「弥生時代中期」像をそこに形成している。そのようにしてのち、「ガラス釧」をいよいよ登場させ、さらには、「古代中国から渡ってきた弥生中期のもの (p. 190)」とこれを設定した。前述のように、『内海の輪』発表 (1968年) 当時、弥生時代資料としての確実な「ガラス釧」出土事例はわずかに一点 (前原市二塚遺跡出土事例) だけであったにもかかわらず、である。



図7. ガラス釧出土遺跡と「蓬菜峡」

が行われていた「大風呂南墳墓群」1号墓からの出土品のひとつであった。

日本考古学協会編集・発行の1998年度版『日本考古学年報』第51号 (2000年7月1日発行) 所収「各都道府県の動向」のうち「26 京都府」の当該頁に、府下の弥生時代に関する調査動向事項の一例として「大風呂南墳墓群」1号墓に関する記載がある。それによれば、ガラス釧を出土した遺構は、内面に朱を塗布した舟底状木棺 (全長4.3m, 幅1.3m) を主体部とする「大規模墓壇」 (全長7.3m,

これまで列記してきたように、『内海の輪』において考古学は主人公の専攻する学問として設定され、物語は「ガラス釧」の出現により新展開、そして「ミステリー」の終結へと進行する。すなわち事の顛末に結び付く「<sup>ミッシング・リング</sup>失われた欠片 (p. 208)」ともなる。私見ながら、事件解決への最終段階の描写は急展開であるばかりでなく、やや呆気なくもある。それは、直前までの物語展開が、事件当事者の動静はもちろんとし、とりわけ遺跡、遺物に関する記述がかなり考古学的事項を濃密に含み、仔細を極めていたことに一因があると思料される。

『内海の輪』における考古学の設定には、「高地性集落」、「細形銅剣」、「銅戈」、「畿内第三様式」土器、「多紐細文鏡」

『内海の輪』から30年後の1998年、あらたに、弥生時代のガラス釧が発掘調査によって実際に出土してしまった。それは、明治期にガラス釧が出土した「三重古墳」の隣町 (当時：与謝郡岩滝町、現在の行政区分では京都府与謝郡与謝野町) からであった。このガラス釧資料出土についての地元教育委員会 (当時：京都府与謝郡岩滝町教育委員会) による公式発表は9月24日。それは「携帯電話のアンテナ基地を造るための発掘調査」 (9月25日付朝日新聞朝刊報道)

幅4.3m、深さ2m)。ガラス釧は「被葬者の左附近から」出土した。コバルトブルーのこの「ガラス製釧は外径9.7cm、厚さ1.8cm、重さ170gを測り断面形態は五角形」、そして「弥生時代後期後半」に帰属する「大陸からの搬入品」とみなされている（『日本考古学年報』第51号、215頁）。

大風呂南1号墓からのガラス釧出土（1998年）に先立ち、丹後から近畿に至る地域からは注目すべき考古資料の出土報告がそれまでに相次いでいた。なかでも、1994年1月には近接する京都府京丹後市の旧弥栄町と旧峰山町にまたがる大田南5号墳（築造年代は古墳時代前期）からは、魏の年号「青龍三年」（西暦235年）を記年銘として持つ青銅鏡（方格規矩四神鏡）が出土。これと同じ記年銘鏡は安満宮山古墳（大阪府高槻市安満御所の町）からも、共伴の他の4面の舶載鏡（三角縁神獸鏡2面、斜縁二神二獸鏡1面、半円方形帯同向式獸鏡1面）とともに、1997年に1面の出土事例（方格規矩四神鏡）が発掘調査によって確認されている。ちなみに、安満宮山古墳の年代は、「3世紀中葉もしくは後半と考える見方が有力である」（『日本考古学年報』第50号、355頁）。

これらの考古資料は、それらの帰属年代が示すように、わが国考古学・古代史上の積年課題である「邪馬台国」問題に関連するところ大であり、「ガラス釧」共々、松本清張が現役中の発見事であれば、その独自の「古代史観」は如何様に観たであろうか、との思いに至らされるのは筆者ひとりだけではないであろう。というのも、「清張通史」（1976年1月～1978年7月）所収「邪馬台国」のなかの一節に、松本清張の「考古学」の捉え方について、下記のような一例を見出すことができるからでもある：

「史料や資料が、すべてを語っているとはいえない。だいいち、古代になればなるほど、文字で書かれた史料、つまり文献が少なくなってゆき、空白の部分が多くなる。その空白を埋めるには、推理によるほかはない。歴史上の推理を「史眼」という。「史眼炯々」などという。「史眼炯々」はたんなる空想や憶測ではなく、そこにだれもが納得するような説明がなくてはならない。むずかしくいえば論証である。でなかったら、ただの思いつきにおわってしまう。とぼしい史料は、ぼつぼつと散っている「点」である。「点」と「点」の空白に「線」をひいてつなぐのが、推理である。だから、推理がまちがっていれば、線の引き方もまちがうわけで、さらに見当ちがいの「点」にそれをつなげば、結論はとんでもない方向にそれる。歴史上の推理も、探偵がナゾを解いてゆくのおなじである。ただ、史料と史料の間が、文献的には空白でも、物的なつながりはある。それが遺物や遺跡の研究で、すなわち考古学である」。

## むすびにかえて

松本清張が1968年に発表した作品『内海の輪』における「蓬莱峡」遺跡からのガラス釧出土は、物語上ながら、京都府与謝郡与謝野町において弥生時代の「ガラス釧」が出土したことから、奇しくも、小説（創作）が事実を先取りした結果となった。ガラス釧資料の帰属年代に関しては、弥生中期（「蓬莱峡資料」）と「弥生時代後期後半」（与謝野町資料）というように若干先後するものの、物語中の考古学者江村宗三の見解としてこれを「古代中国から渡ってきた（p. 190）」ものとした

ところは、謝野町資料ガラス釧を「大陸からの搬入品」とする今日の学術的見解と相呼応する。しかも、双方ともに近畿圏内における弥生時代資料となっている。

筆者は、「ガラス釧」という考古学上極めて稀有な資料が、多種多様な考古資料から敢えて択一され、かつ、物語の核心に関わるものとして応用されたところに強く注視させられるのである。この物語設定は、もちろんあくまでもフィクションとはいえ、あらかじめ蓬莱峡周辺域に関する弥生時代資料をかなりの程度に把握・咀嚼し、しかもそれを当時の学説に精緻に合わせ検討し得た作家のみが成し得るところとおもわれる。それは、作中の考古学者江村宗三をして再読させたとする報告書『摂津高地性遺跡の研究』からの資料分析検討に類することから可能となったとも推察されるけれど、この「報告書」はもちろん創作物である。恐らく実際には、前述のように『兵庫県文化財調査報告 第1冊 神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈 調査報告書』（図版篇1966年、解説篇1969年、兵庫県教育委員会）のようなものに依拠した成果であろう。あるいは、作家は次のような基礎的論文を精読・咀嚼していたのかもしれない：小野忠熙「瀬戸内地方における弥生式高地性村落とその機能」、『考古学研究』第6巻2号、2～12頁、1959年9月20日発行、考古学研究会（岡山）。なぜなら、遅くとも1950年代半ばまでには、松本清張はその作品群のなかに独自の「考古学もの」の作品世界をすでに確立していたからである。

松本清張は「考古学」をさまざまな手法でその作品に登場させている。ある時は考古学者とその世界（学界）を、ある時は遺跡、遺物を、またあるときは、なぜ作品中のここに「考古学」を登場させなければならないのか、とその執拗さが訝しく思われることさえ一再ではないほどである。

比較的初期の作品のうち、『距離の女囚』（1954年3月）、『断碑』（1954年12月）、『石の骨』（1955年10月）などの、いずれも考古学者とその人間模様を主題とする、「考古学もの三部作」とでもいうべき短編では、日本考古学界に関心を持ちそのあゆみを少しでも知る者にとって、それがほとんど「実録」であることを容易に看破しうる内容となっている。それだけに、読後感には異様なばかりの重たさを伴う。やはりこれもまた松本清張のいわゆる「社会派」世界そのものとみなすべきであろう。

その独特の、また時として斬新奇抜な解釈で注目を集めた古代史論「古代史疑」（1966～1967年）、「古代探求」（1971～1972年）、「遊古疑考」（1971～1972年）、「清張通史」（1976～1978年）あるいは随筆集「古代史私注」（1976～1980年）などでは当然ながら、さらに松本清張作品には数々の考古学遺跡、遺物が様々の状況下に具体的に、しかもしばしば独自の解釈を示唆するかのように入場して、物語の展開をより異彩にしている。たとえば須恵器の器種のひとつ「匱（はそう）」を取り扱った『笛壺』（1955年6月）；弥生時代の収穫具（石器）の一つ「石庖丁」の登場する『支払い過ぎた縁談』（1957年12月）；「神籠石」、「加曾利E式」（縄文式土器）、「石斧」、「石匙」に言及し、「勾玉」とその石材を取り扱った『万葉翡翠』（1961年2月）；志賀島（福岡県）より江戸時代に発見されたと伝わる「金印」を作品導入部に使った『月』（1967年6月）；「三角縁神獸鏡」、「櫛描文土器」の登場する『鴟外の婢』（1969年9～12月）；ドイツの旧石器時代化石人骨「ハイデルベルグ人」を取り扱った『ネッカー川の影』（1990年4月）；古代アッシリアの「シリンダー・シール」

や「コプト織」を使った作品『礼遇の資格』(1972年2月)等々ほか多数が挙げられる。『内海の輪』もこの系統の作品のひとつとみなされる。

いまひとつの系統は、先述のふたつの系統とはやや趣を異にして、作品中の主人公あるいはその関係者がそのプロフィールにおいて考古学と補足的繋がりのあるかたちで登場する、という設定のものである。ここでは「考古学」が、あたかも小説における「隠し味」であるかのような一要素として、作品全体にある種のアクセントを付ける。時として松本清張自身、考古学と関連したその経歴、考古学に向う姿勢と相重なり注視すべきと思われる。たとえば、主人公の所属大学の学長が考古学者という設定(『カルネアデスの舟板』, 1957年8月); 古代遺跡歩きを好む東京地検配属の検事を主人公とする『波の塔』(1959年5月~1960年6月); 食品会社に勤める主人公の上司(社史編集室長)が考古学マニアという設定(『風紋』, 1967年1月~1968年6月)等々ほかの作品などがこれにあてはまる。

なかでも『不安な演奏』における主人公の知人である「久間隆一郎」なる人物は、考古学が趣味の映画監督という設定だが、この映画監督に松本清張自身が重なる: 「久間隆一郎があらゆる面に好奇心が強く、詮索的な性分の持主だったことだ。彼の作品にもその傾向が顕われている。一つのものを取り組むと、久間監督はあらゆる調査に手間を惜しまない。作品を大事にするという気持ちからであったが、もともと、久間隆一郎は、ものを調べるという興味が強いのである。(『不安な演奏』, 1961年3月13日~12月25日)」。

あるいはまた、作品ジャンルこそ異なり、主人公が考古学ではなく大学の英語教員の場合にも、主人公が取り組む疑義探求の動因に同様のところがみられる: 「大体、私には興味を覚えたことはとことん打ちこんで調べてみないと気がすまないという性格があった。それは子供のころからそうで、そのためシツコイと云われたこともよくある。他人から見たらばかげたことでも私はその間、ほかのことは全く手がつかないほど熱中するのである(『屈折回路』, 1963年3月~1965年2月)」。

この「性分」こそが松本清張作品、とりわけ「考古学もの」に迫真性、「リアリティ」を創出する基となっておりとおもわれる。それは松本清張が「推理小説はもともと異常な内容を持っている。いわば人間関係が究極におかれた状態である。だからこそ、推理小説にはもっとリアリティが必要なのである。サスペンスもスリルも謎も、リアリティのないものには実感も感興も湧かない(エッセイより — 推理小説の読者 — (『随筆 黒い手帳』1961年所収))」を執筆信条とし、そのために徹底した取材を励行したからである:

「たとえ筋は空想であっても、小説には現実がなければならないから、部分についてはできるだけその方面のことを取材する。人と会うこともあるし、背景となっている土地にでかけることもある。むろん、参考書も読む。それでわからなければ専門家のところへ聞きにゆく。面倒な理論も、専門用語や専門的表現をのけると、常識的なものに還元できると私は思っているので、納得がいくまで聞く(『エッセイより — 私の小説作法 —』1964年)」。

その程度があまりに周到徹底しているので、読者は時として「空想」と「現実」との境をあたかも行ったり来たりするかのような幻惑を覚えるのである。そしてさらには、『内海の輪』のガラス



釧のように、結果として「予察」的要素が現実化する場合となる。先述の『屈折回路』について、それが「後年のオウム真理教事件や O157事件を先取りしたような不気味なリアリティがある（郷原 2005年）」と評されるところとも相共通する。この点こそがもちろん松本清張作品の醍醐味であり、鑑賞・堪能すべき独特の世界のひとつとなっているのは事実である。そして、考古資料という歴史解釈構築の「物証」が要件として小説において効果的なはたらきをする時、それらの学術的真価、設定の意義、おそらく松本清張の云う「リアリティ」性を把握すれば、小説の魅力はなお一層倍加して迫り来るのではなからうか。それとも、まったく反対に、読み方において考古学的深入りはその小説の本意をむしろ曇らしてしまうものだろうか。大方のご意見・ご批判を乞うところである。

### 参考文献

- 郷原宏 2005年、『松本清張事典 決定版』，角川書店。
- 田辺昭三・佐原真 1966年，「 弥生文化の発展と地域性 3 近畿」，『日本の考古学 弥生時代』（和島誠一編），河出書房新社，（昭和47年，八版）。
- 原田大六 1975年，『日本国家の起源 上』，三一書房。
- 兵庫県教育委員会 1969年，『神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈 調査報告書 兵庫県文化財調査報告第1冊』。
- 水野清一・小林行雄編 1959年，『図解 考古学辞典』，東京創元社，（昭和49年，七版）。
- 森貞次郎 1968年，「弥生時代における細形銅剣の流入について」，『日本民族と南方文化』（金関丈夫博士古稀記念委員会編），127～161頁，平凡社。

（おおつ ただひこ：アジア文化学科 教授 Ohtsu@chikushi-u.ac.jp）